

## 阿部朋子論文内容の要旨

### RISK FACTORS FOR MALARIA INFECTION AMONG ETHNIC MINORITIES IN BINH PHUOC, VIETNAM

(ベトナム・ビンフック省の少数民族におけるマラリア感染のリスク因子)

阿部朋子、本田純久、中澤秀介、Trinh Dinh Tuong, Nguyen Quang Thieu, Le Xuan Hung, Le Khanh Thuan, 門司和彦、高木正洋、山本太郎

Southeast Asian Journal of Tropical medicine and Public Health,  
Volume 40 No.1, January 2009 (in press)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻  
(主任指導教員：高木正洋教授)

**緒言：**ベトナムにおいて、マラリアは平野部ではほぼ制圧されたが、主に少数民族の生活する山間部ではいまだに高度な流行があり、住民の健康を脅かしている。地理的なアクセスの悪さ、また平地民とは異なる少数民族の生活・行動パターンなどから、コントロール対策実施が困難であり、さらに感染状況やマラリア感染のリスクファクターも明らかでない。本研究は、ベトナム南部の少数民族居住地域におけるマラリア感染のリスク因子を明らかにすることを目的として実施した。

**対象と方法：**ビンフック省中央部にある少数民族の村の全住民を研究対象とした。世帯訪問により、個人に対する血液検査（マラリア感染の顕微鏡診断）、および世帯の代表者に対する質問紙調査を実施した。単変量・多変量解析により、マラリア感染と生活・行動パターンの関連からリスク因子を検討した。すべての調査は、長崎大学熱帯医学研究所、ベトナム国立マラリア学・寄生虫学・昆虫学研究所の倫理委員会の承認を得て実施した。

**結果：**同意が得られた159世帯の682名に対し、血液検査および世帯調査を行った。この村では全世帯が定住して農業を営み、経済状態は比較的良好であった。315ヶ所の寝床のうち、246ヶ所(78.1%)に蚊帳があったが、適切に殺虫剤処理されているものはなく、穴や破損のある蚊帳が117張(47.5%)あった。顕微鏡診断によるマラリア陽性者は42名(6.2%)であり、感染率は3～5歳で最も高かった(21.7%)。多変量解析の結果、マラリア感染に有意な関連があったのは年齢グループ(3～5歳)、大家族(5～7名/8名以上)および住居の壁が木または竹であることの3つであった。蚊帳の所有および使用頻度は、マラリア感染とは有意な関連が見られなかった。

**考察：**近年ベトナムでは、少数民族のマラリア感染は夜間の森林活動がリスク因子であるとの報告があり、成人男性をターゲットとした新たなコントロール対策が検討され始めている。しかし一方で、自然環境や経済状態の変化により少数民族の生活や行動パターンも変化しており、リスク因子は一様ではない。本研究で明らかになったリスク因子は、住民が夜間自宅で蚊に刺されることによりマラリアに感染していることを示し、また適切な治療や蚊帳使用がまだ浸透していないこともわかった。よって、従来実施されてきた適切な早期治療と蚊帳による予防の拡大・浸透により、近い将来のコントロールが可能であると考えられた。